小説

匂い桜

（２００６）

1

私が伊豆半島の南に移住して一ヶ月ほどして周辺の人々の様子がわかりかけてきたころ、画家Bさんに挨拶に出向いた。谷の向こう側ではあったが、私の家に一番近いお隣さんだった。私よりも一年ほど前に、ここに住まいとアトリエを建て、奥さんと東京から移住してきた、とだれかから聞いて、十数世帯のこの地区での、近所付き合いの仕方などを先達として伺っておこう、と思ったからでもある。

Bさんは機嫌よく私を迎えてくれ、自宅とは別棟になっている工場のようなアトリエを見せてくれ、作りかけの庭を指して、まったく手の焼ける労苦で、もう降参だ、と万歳をする格好をした。それからしばらく談笑したあと、今夜は夕飯をいっしょにしませんか、と私を誘った。

「そのかわり、夕食の用意ができるまで、私に付き合ってくださいよ」と、４ＷＤ車を車庫から引き出し、それほど遠くない波勝崎付近まで私を連れて行った。途中、免許取立てだ、と告白したので、きっと一人で運転するのが不安だったのだ。

道端に車を止めて車外に出ると、カメラを向け、「うーん、もうすこしだなあ、あと数日かな」といいながら、しきりにシャッターを切った。谷の向こうに午後の陽射しを受けた山の斜面があった。三月の末、春はまだ眠っていたが、淡い色彩の山桜の花びらが若葉といっしょに開き、春の装いをはじめていた。

「あなたは海が好きで伊豆半島にこられたと言っていましたが、海のように大きな、マクロのものに向いた眼も、道端の花のように小さな、ミクロなもののすばらしさに、やがて眼が行くようになるかもしれませんね」

夕食の席で、Bさんは画家らしい見解を私に投げた。アトリエで拝見した製作中のシルクスクリーンが、闇の中に開く花びらと蝶をモチーフとし、山桜の微妙な色彩を写し取っていることを思いおこした。

「いのちの、ふるえるような繊細さを捉えることが、私のテーマです」とBさんは言った。

これが、半島の野生の山桜に私の意識が向けられた最初のきっかけだった。

私の住み家の眼前でも、海に向かって開けた谷間が一面の山桜の群生で覆われていることに、Bさんとの出会いのあと、気がついた。都市のソメイヨシノの単色を見慣れた私の

目には、山に溶け込んでしまうような山桜の曖昧なひろがりは、かすみのようにしか当初は映らなかった。だが、桜の開花を毎年ながめていくうちに、大自然が一年をかけて織り上げる壮大な絵巻の意味を理解するようになった。

まもなく、やはり都会から移住してきたMさん夫妻と知り合った。レンガを張った本格的な造りの洒落た洋館が別荘地の高台にあることに気付き、車を停めて降りてみた。広い敷地に眼を転じると、ゆるやかな傾斜の庭の隅に、洋館とは対照的な純和風の建物が建築中で、これから壁の仕上げにかかる段階であった。作務衣姿の小柄な人物が中からあらわれた。

「茶室ですか？」と私が聞いた。

「趣味でお茶をやっているもので、本式の茶室をつくってやろうと思いましてね。茶をたしなまれるのですかな？」と、その人物は細い目をいっそう細くして私に聞いた。

「いや、そのような洗練された趣味には疎くて、はずかしいのです。最近読んだ本で、利休と秀吉をめぐる『本覚坊遺文』という小説に感心し、茶の世界にいささか興味を惹かれておりましたので、この茶室らしき建物に眼が行ったのです」

「ほほう、懐かしい書だなあ。私が数寄の世界に惹かれたのもあの、井上靖の小説がきっかけでしたね」

彼は細い目を開き、わずかばかりの顎ひげをつまみながら、「ご覧になりますか？」と言って私を裏門から招き入れて、造りかけの茶室の内部を詳しく説明してくれた。

篠竹で編んだ下地に漆喰を塗るのだが、編み方ができる職人がこの辺にはいないので遠くから呼び寄せてやってもらっている、とか、この漆喰の材料となる土を京都の方から取り寄せているのだが、他所の土だけだと、この沿岸の気候風土になじまずにひび割れや雨漏りが生じるので、半分はこの地の土を混ぜなければならない、しかしその割合が分からないのでいま実験中なのだ、という風な、まことに本格的なことを次々と説明した。

それから、Mさんとの付き合いが始まった。といっても茶室はなかなか完成しなかったので、洋館の二階に作られた茶室で茶のもてなしを数度受けた程度、たまに下田のスーパーマーケットで顔を合わして挨拶するくらいだった。Mさんは若くして貿易会社を興して成功し、五十歳にさしかかるとさっさと身を引いて、好きなことに傾注することにしたそうだ。何事に対しても本物を求める性格は、茶室の建築の作り方の通りだった。初めて茶席に招かれたとき、中途半端な作法をしても駄目だと思い、

「私は心得が全くありません。即席でお点前を教わって真似ごとをするのは私の本意では

ないので、無作法で参ります」と私が身勝手な言い訳をすると、
「まことに結構です。茶の作法というのは人の所作を型にはめ込むためにあるのではなく、心の自在な流れが一連の形になってあらわれたものです」と、『本覚坊遺文』の茶の湯者のようなことを言った。
翌年の春、寒波がずっと続き、三月には沿岸部にはめずらしい降雪が二度もあって、桜の開花が例年より遅れた。
Mさんから電話があった。
「今年の山桜はきっと見事でしょう」
「どうしてです？　こう寒くては花が縮こまっているようですよ」
「いや、こういうときこそすばらしい花見ができるのです。ご存知のようにこの辺の桜は大島桜や山桜、その交配種が混在しています。種類によって開花時期が違うので、ばらばらに咲くのが例年ですが、今年のように寒いと、まだだ、まだだと、咲くのをみんなじっと待っていますからね。そして暖かくなったら全員がそれ！とばかりに、いっせいに咲くのです。そういうときはまったく見事ですよ。山が全部桜の花になります。今年はあと一週間もすれば暖かくなるという天気予報だし、桜だってもう我慢の限界ですよ。それでね、こういう滅多にない機会に茶仲間で花見をしようということになったのです。山桜の花の下での野点にご招待しますが、今度の日曜はいかがです？」

2

意外な場所だった。
雑木林の間から時折光る海が見える道は通る人もなく、草も伸び放題、落石も方々に転がっていた。時折顔に当たる小枝を避けながら、こんな人里離れた場所で花見など本当にやっているのだろうか、と疑いがわいてきたころ、開けた空間に出た。道はそこから先は急に細くなって薮に隠れ、さらにその先は深い谷になっていた。
そこは妻良湾の南から吉田に向かう遊歩道のさらに枝道だったが、地元の茶の弟子が事前に草刈りして設営した地面に緋毛氈が敷きひろげられ、すでに五、六人の先客が思い思いに座して重詰めをつついていた。座の真ん中にいたMさんが、毛氈の緋色が反映したのか酒のせいだったか、赤い顔をして私を手招きした。客同士を紹介するようなわずらわしさもなく、気ままな宴会だった。花見というのは、咲き誇る桜の花の下でするものと思っていたのだが、頭上には桜の枝木はなかった。
そこは谷の際に突き出したテラスのような場所で、眼前には視界をさえぎるものはなく、

谷の向こうまで広大な虚空があった。その虚空をかすみが満たし、春のやさしい光を吸ってわずかに動いていた。

時折薄れるかすみを透かして、野生の桜の大群落が谷の向こうの急峻な斜面を覆いつくして一斉に開花しているのが浮かびあがってきた。

幾千万の、純白や淡桃色の爛漫たる花びらが、生まれ出たばかりのやわらかい緑や緋色の若葉に包まれて渾然として交じり合った。私は息を呑んだ。

山が笑っていた。

客の一人が立ち上がり、桜の群落に対峙して朗々と詩を吟じた。鶯が、まだ舌足らずの鳴き声を切れ切れに引きずりながら、谷を渡った。

だれかが私の袖を引いた。私は陶然とした気持ちからもどされた。私の袖を引いたのは若い和服の女性で、私をさらに奥の小道に案内した。

開花した桜の大きな樹木があった。根元に石で囲った炉が切られ、莫蓙が敷かれていた。Mさんの奥さんが和服姿で端座していた。客をひとりずつそこに招いて、花の下で茶を供するという、まことにMさんらしい優雅な趣向だった。私も神妙に座って茶をいただいた。

そのとき、笛の音を耳にした。私は茶碗から顔を上げた。調べは林の中から流れてくるようだったが、奏者の姿は見えなかった。怪訝に思っていると、

「わざと隠れて吹いているのですよ。主人の演出・・。」奥さんがそう言って、微笑んだ。

笛の音は、嫋々として細い金糸のように桜の花にまとわりつき、谷に下っていった。

3

私の同郷の友人がその翌年、桜の季節にたずねてきた。薬学の専門家で、製薬会社で毒物の研究をしている男だった。仕事の関係で昆虫や植物にやたらに詳しかった。

「道々、野生のサクラを探索してきたが、ここは驚くほど豊かな種類のサクラの、途方もない群落地だね」、と、挨拶がわりにそう言った。興味を惹く植物があると、どこまでも足を踏み入れてしまうのも彼の性癖だった。昨年の野点の、サクラの桃源郷のことを私から聞いていたので、余計探索に弾みがついたのかもしれない。その夜、地魚を肴に、久しぶりの酒を酌み交わしていると、彼が奇妙なことをいった。

「君、サクラがバラ科なのは知っているだろう。バラ科の植物ってのは、曲者だね」

「どこが？」

「うん、あいつらは人間を利用して繁殖している節がある。植物というのは動物が地球に存在するはるか以前から風や水、地球の重力まで利用してきたし、昆虫が現れればただち

に昆虫を利用する、という戦略家だ。人間は一番遅れて現れた種だが、バラ科の植物は新登場の人間の有用性を見抜いていた」

「どうやって？」

「リンゴ、ナシ、イチゴ、おいしそうな果物はみな、バラ科さ。おいしければ人間が栽培し、増やしてくれる。それからバラ自身さ。あれこそ人間に媚び、うつくしい花を咲かせ、かぐわしい香りを振りまいて人間をそそのかす。人間は汗水たらして栽培し、交配まで手伝ってやって、さまざまな変種を作出してきた。バラ科というのは異種同士ですぐ交配して多様な変種を生みやすい性質なんだ。サクラもバラ科だ。花に人間は踊らされ、あちこち植えまくった結果、日本中がサクラに席捲された。サクラの作戦にみごとにのせられた」

「でもこの辺のサクラは自然繁殖じゃないかね？　こんな急峻な沿岸部に人間が介在したとは思えない」

「今日山道で出会った老人に聞いたんだが、ずっと以前この海辺の地方では、サクラはある目的のために利用されたそうだ」

「どんな目的？」

「昔は冷蔵庫などという便利なものはなかったさ。だから、海で獲れた魚をサクラの木片で燻って保存した。それから葉っぱだ。これはいまでも草餅などを包むのに使われる。サクラは幹を切られると株立ちしてますます幹や枝を増やす。だからサクラは大手を振ってここで生き延びた」

「サクラのチップは燻製にいまでも使われるな」

「そういえば今日、サクラ探訪の最中に、どこからかすばらしい芳香がするので、なにが匂っているのかとあたりを見回した。私は匂い物質を研究したことがあるから、花の香りから種類を言い当てることができる。不思議に思ってあたりを探したのだが、花といえばサクラの群落だけだ・・・君、芳香性の強いサクラ、というのを聞いたことがあるかね」

「万葉集かなにかに、桜の、匂いぬるかな、とかなんとか言う句があったね」

「あれはたとえだよ。咲いている様子がまるで匂うようだ、と言ったのさ」

「しかしだよ、君が言ったように、バラ科としては芳香性を売りにしているのだし、変種ができやすいなら、匂う種類があってもおかしくはないだろう」

「ふーむ」

友人は急に考えに沈んだ。

友人が帰って数か月して、一冊の本がその友人から郵送されてきた。「伊豆の桜」とい

う題だった。添えられた手紙にこう書いてあった。

『例の芳香性のサクラの存在が気になって、あれからいろいろ調べてみた。伊東に引退した元新聞記者が伊豆のサクラについて本を出していることを知り入手したが、匂う種のことは書かれていないし、半島南域の大群落については無知なのか、まったく触れていない。私の役には立たなかったので、その書を君に贈呈する。しかし、私が調べた範囲では、芳香性のサクラ、総称して「匂い桜」と言うようだが、たしかに数種存在する。しかもその中のもっとも芳香の強い変種が、ある遺伝学者の手によって伊豆半島の山中で発見され、保存されている。私が出会った芳香ももしかしたらこの種のサクラか、または未知の種類だったかもしれない。その「匂い桜」は、三島市の遺伝学研究所の敷地内に植えられている。私は簡単には行けない。伊豆に住む貴君が、機会があったら、確認してきてほしい』

私はこうして、伊豆半島暮らしの年を重ねるたびに、伊豆の野生のサクラに徐々に引き込まれて行き、ついに、幻の「匂い桜」の存在が私の心に根を張った。

4

二〇〇六年三月末、半島の南では例年通りに、桜が花開いた。

私は遺伝学研究所の門をくぐった。三島に用事があったので、午前の用事を済ませてから立ち寄った。そこは三島市郊外の南東の高台にあり、「遺伝研」の愛称で呼ばれ、一般の人々に親しまれていた。遺伝子の研究所といういかめしい施設がなぜ市民に親しまれているかと言うと、研究所内に二百数種の桜が植えられ、桜の開花時期のピークには研究所が一般に開放され、大勢の人たちが桜見物に訪れるからだ。私が午後の平日とはいえ、桜が咲き始めた敷地に桜見物らしい人の姿がまったくないことが意外だった。

私は側門の駐車場に車を停め、メタセコイヤの巨木が左右に聳え立つ研究所の正面に向かって歩いた。受付をのぞくと、女性事務員が中から小窓をあけた。研究所の桜に興味があって訪ねたのだが、見学できるだろうか、と私は尋ねた。普段は見学ができないが、一般開放日を毎年四月第二週の土曜日に設けてあり、その時には三島駅や近くの駅から遺伝研までシャトルバスが出るほどの賑わいになる、と事務員は告げた。

私は受付に礼を言って外に出た。駐車場にもどり、開けた車のドアに顎をのせ、構内の奥に眼を向けた。駐車場のすぐ先から桜並木が続いていた。開花している種類はまだすくなく、開放日あたりがやはりピークなのだろう。

私はドアを後ろ手に閉め、歩き始めた。桜並木は百メートルほどまっすぐに、緩やかな

登り斜面に沿って続き、北側のはずれで右に曲がり、研究所の敷地の辺縁を半周しているようだった。すべてのサクラの樹の根元には名札が差してあって、学名と説明が表記してあった。

私の目的は「匂い桜」だ。無断で見学している後ろめたさから、上を向いての花見は遠慮して、うつむいて根元の名札を一瞥ながら足早に歩いた。芳香性のサクラらしい名札は確かに数種あった。私の目に留まった説明書きでもっとも強烈そうなものは、「千里香」という名の種類だった。「千里まで匂う、というのがこの名の由来であるが、実際の香りは微弱である」と書いてあった。花がまだ開いていなかったので、確かめようがなかったが、どうもこれではないらしい。

そのサクラは、構内の一番奥に、そっと隠れるように花開いていた。芳香はすでにあたりに漂い、私が名札を確かめる前から、その存在を前触れしていた。その匂いを鼻腔に感じたとき、私の胸が高鳴った。濃密に芳香するサクラに、ついにめぐり会った。

「伊豆桜」

足元の名札に、そう、名が記されていた。

それから十日ほど後の四月八日、私はふたたび遺伝研を訪れた。構内でシャトルバスを降りると、驚くほどの人出だった。天幕が入り口に張られ、研究員たちが総出でパンフレットを配っていた。次々に手渡された相当数のパンフレットに眼を通したが、サクラの解説や説明をしたものは皆無だった。パンフレット類は研究所各棟で展示される遺伝や細胞に関する実験と、ホールでの講演の案内だった。しかし訪問客の大半は桜見物が目的であるのは明らかで、三脚にカメラを据えてじっくりと花にレンズを向けている常連らしき人たちが目立った。

桜並木のあまりの人ごみに辟易して、しずかな館内で展示ブースを見て回った。遺伝研で研究している各分野が工夫を凝らして展示されていた。各ブースにはパソコンが総動員され、顕微鏡下の細胞分裂の様子をコンピュータが時間を圧縮し色調を変化させ自在に表示して見せた。色覚を遺伝子操作された数種のショウジョウバエがどの色に集まりやすいか、競馬レースを模して馬券を発行して当てさせるなど、研究員たちの知的能力は研究にとどまらず、展示の演出手法にも大いに発揮されていた。ハツカネズミを使った展示棟では、ヌードマウスが遺伝や免疫の研究に如何に貢献しているかを説明していた。また、ハツカネズミを水につけてストレスを与え、ストレスがネズミの遺伝子に影響を与えて子孫

に遺伝的に継承されるかどうか、という実験があり、担当の若いハンサムな研究員に女の子たちが大勢群がっていた。しかしネズミの遺伝には興味も示さず、ガラス箱の水に漬けられたハツカネズミにカワイイ～とカワイソ～を連発して、やがてがやがやと出て行った。女の子たちにいささかうんざりしていた研究員に、私は正面切った質問をした。

「交感神経の興奮に過ぎないとみなされていた感情が、じつは、免疫機能に深く関与することが近年明らかになってきていますね。たとえば免疫をもっとも活性化させるのは、喜びの感情より悲しみの感情のほうがより強い、というような予想外の論文を読んだことがあります。つまり、感情がおどろくほど生命の根幹に関わっている、ということです。あなたのハツカネズミとストレスの研究が、ストレス＝苦痛という感覚の領域を超えて、感情が、免疫に関与する遺伝子へ影響をおよぼす、ということが実証されたら、それはまさに画期的な大発見でしょうね」

研究員は目を輝かせた。たとえば、癌は豊かな感情の持ち主には発生しにくいし、長寿の人は皆よく笑う、というようなことを、私たちは議論したあと、

「でも、ハツカネズミに人間の喜怒哀楽のような、高度な感情が存在することをまず、実証しなければならないでしょうね」と彼は言った。

「つまり、ハツカネズミに、愛、があるかどうかを調べる方法を確立する必要がありますね」と、私は着地点を求めた。

別の研究棟ではセンチュウという微細な奇妙な虫について解説していた。

「センチュウは消化器官だけのようなひどく単純な身体構造ですが、遺伝子的には人間とあまり違わないのです。そして繁殖期間が極めてみじかいので、数世代にわたる遺伝的結果がすぐ分かります。人間だったらわずか一代の遺伝的結果を見届けるのにすら、数十年かかりますから・・」

センチュウ、ハツカネズミ、ショウジョウバエが遺伝研究に利用されるのは、圧縮された時間で観察できる利便性と、いつでも同一結果を検証できる普遍性のためだ。研究者の寿命より長い時間を要し、同一結果をもたらさず変種を生じてしまうサクラの遺伝的研究は、いつの間にか遺伝研から消滅し、自然の手に帰されたのだ。

ホールで行われた遺伝学の最先端についての講演を聞いたあと、開放された資料室に寄った。そこで、かつてサクラの研究にまい進し、ソメイヨシノの起源の研究者として有名で、日本のサクラの遺伝子を保存する必要を感じて日本中から収集し、研究所の敷地に植生した人物を知った。今日、遺伝研がサクラで埋めつくされているのは、この人物のおか

げである。

国立遺伝学研究所・細胞遺伝部部長、竹中要博士がこの世を去って久しい。

「伊豆桜」はもう花を散らし、その芳香は失われていた。私は桜並木に立って腕章をつけた遺伝研の研究員に近づき、尋ねた。

「ここのサクラについて聞きたいことがあるのです。サクラのそばに立っておられるのだから、サクラの説明要員ですか？」

「サクラの専門ではありません。枝を折ったりされないように見張りをしているだけです」

「今日、館内で研究展示を見て回ったのですが、不思議なことにサクラの研究はなにもなかったですね」

「現在、遺伝研でサクラの研究はしていません。もう研究者もいないので、管理も植木屋まかせです。寿命で枯れはじめ、貴重な種も喪失しつつあります」

「本日こんなに賑わって人々が遺伝研にやってくるのは、ショウジョウバエやハツカネズミがお目当てではなく、この見事なサクラのコレクションのためでしょう」

「そういわれると、困るのです」

青年研究員は苦笑した。

私は彼から離れ、「伊豆桜」の下に腰を下ろした。このサクラは、人々が大勢やってくるのを避けるかのように、私の前でひっそりと咲き、ひそかに香りを放った。いま、若葉の陰でひそかに種を育てているのだ。

私の心に、最愛の女性の面影が浮かんだ。彼女はひっそりと私の子を宿したまま、交通事故でこの世を去った。

「伊豆桜」の下で、私は喪失した愛の痛みをこらえていた。すると、その痛みが一輪のちいさな物語を花開かせた。私はその芳香に慰めを求めた。

5（物語）

渡部慶一郎が三島の、国立遺伝学研究所に研究員として勤務するようになって一年目の最初の春、恒例の桜の一般公開があり、そのメインイベントである講演会が開かれた。講演者は細胞遺伝部長の竹内恒博士で、テーマは「伊豆半島と植物」だった。

ホールは一般の市民でほぼ満席であったので、渡部はホール最後部に立って博士の講演を聞いた。竹内恒はサクラの研究者として著名で、ソメイヨシノの起源について見解を求められるなど、桜の季節にはかならずマスコミに引っ張り出されるサクラ博士だった。闊

達な人柄でユーモアもあり、フィールドワークが得意で、いつもどこかを飛び回っていた。研究室に立てこもるタイプの他の学者たちからは白眼視されていた。渡部はそんな竹内がリーダーとなる新研究チームに配置されることになった。そこで、今後の長となる人物について事前に知っておこうと思った。

講演内容は伊豆半島で出会った植物や人物談義で、即興で話があちこちに飛んだ。

「知人に変人の植物学者がいまして、伊豆半島の南端の海辺の山林に小屋を立て、奥さんとふたりで道まで自分たちで開いて、有用植物園を作ったのです。海に注ぐ小川が敷地を通っていたので、その周りを開墾して植物を植えた。しかもはるばる遠方から変わった植物を持ち込んだ。たとえばメヒルギ。別名マングローブともよばれる熱帯固有の植物だが、伊豆半島の河口に植生してみた。植物学では「順化」と言うのですが、その種が存在しなかった地域に新しい種を適応させることです。ところが、マングローブの順化に成功して、伊豆半島南岸をマングローブの北限にしてしまった。彼はこの強靭な海辺の熱帯植物が海岸の侵食を防ぐのに最適であることをよく知っていた。コンクリートの護岸ではなく、植物で食い止めることができるか、試みたのです。

「また彼はオキザリスという草花の一種を小屋の周辺に植えた。このオキザリスの変種はじつに奇妙な性質があるのだと、彼は私に言うのです。どんな？　気候の変動に敏感で翌年の春の開花が極端に違う。これを研究すれば、翌年の気候を半年前に予測できるはずだ、と言うのです。

「伊豆半島は本来、日本列島とは別の島であったのだが、地殻のプレートに乗って日本列島に衝突した。ちょうどいま我々がいるこの辺りだ。その衝撃で富士山が爆発した。このくっついた半島は、日本列島と異質の、なにか不思議なパワーがあるように私には思えるのです。そのパワーが植物学者を呼び寄せる。なにかを植えてくれ！と招いているのです。

「私は調査のために半島各地を旅して、彼らに会って、植物について面白い話を聞いてきます。あるとき、さっきとは別の植物学者ですが、久しぶりに再会したときは、糖尿病の悪化でほとんど眼が見えなくなっていた。だがね、と彼は言った。目が見えなくなると不思議だ。自分が植えた植物たちの声が聞こえるのだ。異種の植物同士がひそひそ話し合っているのさえ聞こえるのさ。声だけでなく、匂いにも敏感になる。もうほとんど見えないから急斜面の植木たちの間を歩くのはやめた。しかしだよ、縁側に座ったままで、いま、どの植物が花開いているか、手に取るように分かるんだ。匂いが教えてくれるのだよ。そ

うそう、奇妙なことを教えよう。君も植物には私以上に詳しいだろうが、芳香性のサクラを知っているかい？　いやいや、ちょっと匂うくらいなら、サクラも程度の差はあれ、かすかな香りはあるさ。そうじゃない、もっと濃密なんだ。沈丁花のように、ずっと離れたところでも分かるんだ。

「みなさん、沈丁花というのはすばらしい匂いだし、名前もジンとチョウという香料に因んでいます。学名ではダフネ・オドーラと言いますが、これは芳香する女神と言う意味でこれまたすばらしい名前ですね。植物を発見して最初に命名した昔の植物学者は皆、詩人でもありましたね。名前が良いとその植物も気品があるように思える。でもヘクソカズラ、などひどい名前もあります。こういうのは悪臭があったために、命名者に嫌われたからでしょう。だから、匂いは重要ですよ。

「話が横道に逸れましたが、さっきの眼の見えなくなった植物学者の話に戻しますと、彼は匂いに敏感になったために、強く匂うサクラに気がついたそうです。視力がかすかに残っているうちに伊豆の植物相を調べておこうと、助手の娘の運転する車で方々の山中に連れて行ってもらった。ある山中で、全く未知の匂いが漂っていることに気がついた。車を停めて外に出た。いったい何の匂いだろう、と彼はいぶかった。あらゆる花の香りは熟知している彼がそう思ったのです。かなしいかな、彼の微弱な視力はその香りを放つ植物を視認することができなかった。娘に周りの様子を尋ねると、花の咲いた樹木も草花も見当たらない。ただ谷の向こう側の斜面に開花したサクラの群落がある、と言う。

「そうだ、サクラだ、サクラだ。ほら、遠くで、サクラたちが楽しそうに語らっているのが聞こえるのだよ。その中で一番気品のある声、つまり芳香する声を、彼は聞いた、と言うのです」

渡部は、ホール背後のドアがわずかに開いたことに気がついた。振り向くと、若い女性が滑り込んできたところだった。暗がりだったから、はっきりとは姿を認められなかったが、彼女は忍び足で最後列の空いた席を探した。まさに渡部が立っていた目の前で、演壇の照明の逆光の中で浮かび上がったその女性の端正な横顔に、渡部は心を奪われた。

竹内博士の講演は、やがて伊豆半島の植生の多様さ、とくに日本で急速に喪失しつつある原生林・照葉樹林の重要性に触れ、また、潮風に強い沿岸性のオオシマザクラがヤマザクラと自然交配を繰り返して育まれたサクラの原生群落について語った。

「調査のために伊豆半島の野生に足を踏み入れると、植物にとって理想的な気候であるこの地が、彼らの壮大な実験場なのではないかと、感じるときがあります。植物学者たちが

時折誘いこまれ、本人は少しも知らずに実験の手伝いをさせられておるわけです。
「生命は、気の遠くなるような乱費と時間をかけ、試行錯誤を繰り返してきました。そしてその中間結果として、私たちがここにいるのです。私たちはそのことに思いを致し、生命があたえてくれた日々の時間を豊かに生きなければなりません。
「生命ははるかな時間の果てに、いったいどんな姿、形になろうと目論んでいるのでしょう。かつて、生命は巨大化を試してみた。恐竜やマンモスです。でもこれは失敗作だった。なぜなら、地球の重力を考慮しなかったために、自らの重みにつぶれた。重力を振り切るために今度は海に進出した。浮力を利用して自由を獲得した鯨やイルカたちです。これはある程度成功したが、行動範囲は海に限られた。
「生命は地球上で発生したが、なぜか重力から完全に開放されることを望んでいるように思える。鳥たちや昆虫ははるか以前から重力からの自由を獲得した。しかし、そのために脳の発達をあきらめた。そしていま、生物最大の脳を付与され、身体は小型化された人類は、宿命として、重力場を離れた宇宙空間に展開しようとしているのです。
「生命は究極の自由を求め、完璧なうつくしい存在になろうとしているように私には思える。あたかもサナギからうつくしい蝶に変容するように・・。そしてサクラも、生命が生み出した植物の傑作のひとつであり、だから私も、皆さんも、その完璧さとうつくしさに魅せられ、ここにやってきたのです」

6

講演が終わって三十分ほどして、渡部慶一郎は竹内博士の研究室へ挨拶に行った。挨拶の堅苦しさを講演の話題で紛らわせることができるだろうと思った。東棟二階の研究室のドアが開いていて、女性の笑い声がこぼれていた。渡部が緊張して入り口に立つと、笑い声の主が渡部に気がついた。さっきホールでちらりと見た女性だった。ジーンズ姿で、長い髪を無造作に後ろで束ねていた。窓辺の研究机の椅子から、竹内博士が立ち上がった。
「渡部慶一郎です。このたび研究チームに配置されましたので、ご挨拶に伺いました」
「やあ、渡部君、よろしく頼むよ。優秀な新人が遺伝研にやってきたと聞いたので、早速引き抜いたんだ。まあ、入りたまえ」と、講演の続きのような大声で言った。女性が椅子を勧めた。
「いや、結構です。すぐ失礼しますので。あなたも今度チームに参加する方ですか？」と、女性との対応には不慣れな渡部はぎこちなく、しかし半ば期待を胸に秘めて尋ねた。
「わはは、これは私の娘だよ。渡部君」

「三菜子です」と、彼女は弾むような声で挨拶し、健康な笑みを渡部に見せた。
「娘は今、東京の大学で勉強中なのだが、春休みで帰ってきているんだ」
「自主的に帰ってきたわけじゃないのよ。私の母はだいぶ前に亡くなったので、ずっと母代わりに父の面倒を見てきました。東京に出てやっと父から開放されたと喜んでいたら、調査があるから手伝え、と呼び戻されたわ」
「ほう、なんの調査です？」
「サクラの調査ですって。詳しくは私もこれから父に聞くところ」
「そうだ、渡部君、今度の日曜は空いているかい？　もしよかったら三菜子に付き合ってくれませんか。これは今度のプロジェクトとは関係のない個人的な頼みごとなのだから、都合がわるかったら遠慮なく断って結構です」
「どんなことです？」
「うん、伊豆の山奥は標高が高く気温も低いから、サクラの開花は一週間ほどここより遅い。来週あたりから咲き始めるかな。そこで三菜子とある特殊なサクラの変種を探索する計画を立てた。ところが学会ののっぴきならない用事がさっき飛びこんで、来週は出張しなければならなくなった。サクラは待ってくれないし、この機会を逃すと、また来年、また来年、と今までのように先送りしなければならない。そのうち三菜子だってボーイフレンドができれば私の相手などしてくれなくなる。困っていたところだったのだ」
「サクラについては、先ほどの講演でお話されましたが、私も興味を惹かれました」
「ほう、それなら話が手っ取り早い。講演で触れた匂い桜を調査したいのだ。じつはね、私も匂い桜には強い関心があって、あの植物学者が亡くなって葬儀に行った折に、娘さんにあれがどこの場所だったかを詳しく聞いたのだ。助手を兼ねた娘さんだけあって、父親を案内したルートをすべて克明に地図に記録してあった。だから大体の見当はついておる。しかし、そこは道の行き止まりで、そこから谷川の向こうに群落が見えたというから、対岸の山を探さなければならない。滝があるらしい。娘さんの話では、滝の水音を父親はサクラたちのおしゃべりだと思ったらしい。ところで君は、山歩きは得意かね」
「いや、得意ではありません。どちらかというと高所恐怖症で、高いところは苦手です」
「三菜子は山歩きのベテランだから、こっちは大丈夫なのだが・・」
「だって子供のときからいつも調査を手伝わされて、山歩きばかりでしたよ」
「で、そこまではどうやって行くのです？」
「三菜子がオートバイで連れて行ってくれる。モトクロッサだから、山道は平気だよ」

「崖だって登ってしまうわよ」と、三菜子は傍らにおいてあった赤いヘルメットを叩いた。
「こわいな。でも三菜子さんのオートバイもいいですね」
渡部が正直に言うと、竹内博士と三菜子が大声で笑った。

7

早朝の山道を、ところどころに転がる落石をたくみにかわしながら、三菜子の操縦するオートバイは駆け上って行った。渡部はタンデムシートにまたがり、揺れるたびに遠慮なく三菜子にしがみつく特権を満喫していた。
天城山系万三郎岳から八丁池にかけては多くの登山道や縦走路があるが、その北西部、湯ヶ島側には天城山脈の尾根に至る登山道がない。幾本かの谷川が天城山脈から湯ヶ島に向かって深い谷を抉っていて、登山者の接近を拒んでいる。かろうじて川筋をたどって途中まで行く林道が数本あるが、川沿いに点在するワサビ田の農家たちしか知らないような枝道だった。
三菜子はそんな普通の地図に記されていないような山道を迷うことなく、目的地にむかった。道はほとんど谷川に沿っていたが、人里を過ぎるとすぐ未舗装のダートになった。道の山側斜面が崩落し、切り立った崖側の縁をきわどく走らなければならない箇所があった。道の山側も谷側もずっと雑木が繁茂し、遠方の視界をさえぎっていた。
三菜子が一度だけオートバイを止めた。そこは谷の淵で雑木林が切れ、天城の北側にあたる斜面がその切れ間から見えた。三菜子はヘルメットを脱ぎ、山を指した。渡部の目にはうっすらと霧がかかったようにしか見えなかった斜面一体が、野生のサクラの大群落であることに気がつくには時間がかかった。
「ここはじつは父と一度きたことがあります。人間が足を踏み入れることのないこのような隔離された場所こそ、サクラたちが自然交配を繰り返し、我々の眼に触れない多様な変種を生んでいたとしてもなんの不思議はないだろうと、父は特別に注目していました。だけどそのときは山の天気が急変して目的が果たせませんでした」
ついに道が行き止まりになった。オートバイのエンジンを切ると、山の静寂の底から谷川の流れが聞こえた。三菜子は登山用の身支度をした。登山用のリュックを背負い、頼りない足取りの渡部を従えて、谷に向かう斜面を下った。谷川の岩と岩の間には、切り倒されたままの太い丸太が転がっていた。猟師が流れを渡るためであろう。対岸に着くと獣道のようなわずかな道の痕跡があったが、それもすぐ消えた。雑木林の斜面を登りつめ、そこからは平坦な小山の稜線を辿った。

滝に出た。三菜子は立ち止まってあたりを観察した。滝の上部の開口部から天城山の稜線がわずかに覗いていた。登るルートを検討し、滝沿いの岩を辿ることになった。滝は十メートルほどの高さで、水量も多くはなく、黒い露出した岩の間を幾条の水の帯が縫っていた。

三菜子が先頭に立ち、身軽に岩をつかんで登攀し、時々渡部を振り返った。

渡部は、それほど高くはないと思っていたのに、いざ見下ろすと意外な高さで、恐怖を感じた。青い滝つぼがはるか下方に見え、そこに落ちたら死ぬかも知れないと想像すると、尻のあたりが疼いた。三菜子は渡部の恐怖を察し、渡部と入れ替わってしんがりについた。下に自分が居たほうが渡部が安心すると判断したからだ。渡部は先頭を不器用に登り、なんとか滝の上部にたどり着いた。

そのとき、一匹の蝶が渡部の顔に舞い降りた。渡部は突然なにものかが顔にまつわりついて狼狽し、岩をつかんでいた右手でそれを振り払った。手の支えがなくなって渡部の足に重みが加わり、滑った。渡部は三菜子の脇を滑落した。瞬間、三菜子は渡部の手をつかんだ。渡部は三菜子の手にぶら下がった格好になった。おそろしい重さが三菜子の腕にかかり、彼女自身を引きずり落とそうとした。三菜子は岩に保持していた足を踏ん張った。

先ほどの蝶が、渡部をつかんでいる三菜子の手の甲にとまった。ゆっくりと揺れる光沢の青色の羽根を、三菜子は不思議な気持ちで眺めた。同じ私の手にとまる人間の、なんと鈍重なこと。それにくらべ、この蝶の、なんという軽やかさ。同じ生命でありながら、創造主はなんと多様な生き物を作ったのだろう。もしかしたら、父が言ったように、蝶こそ、生命のめざす究極の姿ではないだろうか？　優雅で、うつくしく、自由で、軽やかで・・・ああ、私もこんな羽があって自由に空間を浮遊できたら・・・。

渡部はかろうじて空いた手を伸ばし、そばの小木の根をつかんだ。三菜子の腕から渡部の重さが抜けた。

＊

それから先に起きたことを、渡部はよく覚えていない。落下の恐怖で動転してしまったためだったのか、あまりに現実離れしていた出来事が連続したからか・・。

記憶の断片に留まるのは、やがて二人が茫漠とした花の世界に入り込んだこと。そしてむせ返るような芳香に包まれたこと。三菜子が錯乱したように全裸になり、花の下で舞い、その姿が、軽やかで、うつくしく、蝶のようだったこと。中央に君臨した一本のサクラの巨木を両腕で抱き、滂沱として涙していたこと。それから渡部の衣服を脱がせ、花の下で

交わったこと・・すべてが陶酔、夢遊、幻覚、神話の中での出来事だった。
もしかしたら・・と渡部は、昆虫たちがある種の花の香りに誘引され錯乱状態になることを後に知り、三菜子との花の下の交わりは、あの芳香によって誘発されたのではなかったか、と信じるようになった。二人はあのとき、夥しい数の花・植物の生殖器官に包み込まれ、花粉が霧のように降り注ぐ、生命の営みの真っ只中にいたのだから・・。

８　（物語の、エピローグ）

渡部はそれから数か月後に渡米した。渡部が組み入れられた研究チームは、ヒトゲノムの解読にかかわる初期プロジェクトだったのだか、日米合同でヒトゲノムプロジェクトを推進することが決定し、渡部は米国チームに加わることになった。そのプロジェクトにおける成果を高く評価された渡部は、プロジェクトを離れた後も、遺伝学の最先端を切り開く科学者として海外の機関や大学に招聘されて活躍し、研究に没頭して日本にもどることはなかった。

２００＊年、退官した渡部慶一郎は、日本に帰国した。その機会に三島の遺伝研から是非に、と声がかかり、恒例のサクラ開放日に記念講演を行った。渡部が竹内博士の講演を聞いたあの日から四十数年の歳月が経っていた。

講演を終えると、ひとりの婦人が渡部を待っていた。二人は手を取り合った。婦人は遺伝研構内の奥のサクラ並木に、渡部を案内した。

「伊豆桜」

そう命名された一本のサクラの樹木を指して、婦人は言った。

「ご覧ください。この樹を覚えておられますか。これは私たちの樹です。あのとき、私はこの樹の若枝を採取してきました。帰ってから接木して、私たちがはじめて出会った思い出のこの研究所に植えたのです。このすばらしい生命の遺伝子を継承するために・・」

もう花期を終えて芳香は失せ、葉桜に変わりつつある「私たちの樹」を渡部は見上げた。そして婦人に尋ねた。

「竹内先生は？」

「数年前に他界しました。あなたのことはよく口にしていました」

「でもほんの数か月しか、接する機会がありませんでした」

「いいえ、違います。父、竹内恒は、あなたの、渡部慶一郎の父でもあったのです。つまり、私はあなたの子を身ごもり、生みました。竹内恒の孫です。父は祖父としてあなたの子をずっと慈しんでおりました。あなたの分身とずっといっしょだったのです。女の子で

したが・・」

渡部はわきあがる感情を抑えきれずに聞いた。

「それで、私たちの、娘は？」

「まだ幼いときに死にました。事故でした。私のちょっとした不注意で・・」

婦人は目頭を押さえた。渡部は空を仰いだ。それから、心の内で、はっきりと形を成してくるたしかな思いを、ゆっくりと言葉にした。

「・・ずっと独身で海外暮らしをしてきた私は、家族とは無縁でした。遺伝子や染色体について研究しながら、私自身の遺伝子についてはすこしも省みることがなかったことを、ひそかに恥じていたのです。しかし、私の染色体があなたの胎内であなたと結び合い、生命を得て、たとえひと時でも私に家族があったとは！・・・ありがとう、三菜子さん」

渡部は白髪が混じりはじめた婦人の髪にそっと触れた。

「竹内博士は遺伝学者でありながら、詩人だった。時間の熟成によってのみ獲得できる生命のうつくしさを知っていました。だからショウジョウバエではなく、サクラの遺伝子の研究に自己をささげた。

「私が人生の大半を費やしたヒトゲノムの解読・・それは単純な、整然とした塩基の配列だった。それはヒトの生命を形成する部品の設計図でもあります。奇妙なことに、現存のヒトの構造と対応しない無関係な、不可解で無意味な配列があった。なぜ、生命がこのような一見無意味な塩基の配列を残しているのか、謎です。だか、この『私たちの樹』の下に立って、竹内先生の言葉を回顧していると、分かりかけてきた・・たとえるならその部分は、詩、ではないか、と。生命は、はるか未来の、理想の生命の設計図をそこに夢として、詩として、描いているのではないか。生命が真の自由を獲得するプランが、その詩の余白に書き込まれているのではないか、という予感がするのです。

「私は科学の研究に埋没して、人間として生きるべき豊かな時間をおろそかにしてきました。しかし、あらためて竹内先生の言葉が身にしみる。生命は長い時間をかけて私たちを生み出した、だから時間を大切に生きなければならない、と。・・残念ながら、私の人生ももはや残りすくない。私に残されたいのちの時間を、私は慈しみ、大切に、一編のうつくしい詩として生きて行こうと思います。できることなら、あなたといっしょに・・」

完